



アジア草原における共生 オイラト牧畜民にとっての境界と越境

Ойрад



Ойрад

アジア草原における共生 1-1



1 共生社会の実現に向けて

1.1 違う人間同士がいかに平和に暮らせるのか

共生社会の実現のための方法として、近代以降生まれたのが、国境など実体的な境界線による棲みわけであり、多数派による少数派の同化です。この同化主義に取って代わるのが、一つの国の中で民族の多様性と文化の価値を尊重しようとする多文化主義です。

この多文化主義は、近年、自民族中心主義へ転化する危険性が懸念され、特に「9.11事件」以降、多文化主義への批判が多文化主義を推進してきたはずの西洋諸国で高まり、同化主義へ回帰する傾向が世界各国にみられます。

同化主義的な発想の特徴は、集団同士の文化的な差異をなくすことによって集団と集団との間に存在する境界の消失を求めることにあります。同化主義的な共生は、境界(差異)と相容れない関係になります。それでは、未開とされる牧畜社会、あるいは近代国家の周りに息づいてきた牧畜民たちの間でみられる「共生」の在り方はいかなるものなのでしょうか。ここでは、モンゴル民族の一派であるオイラト系牧畜民の経験から、牧畜民的な「共生」の特徴を整理し、「共生」という概念を広げていきます。

馬車のバランスが崩れたカザフ夫婦を
手伝うオイラト人青年たち



Ойрад

アジア草原における共生 1-2

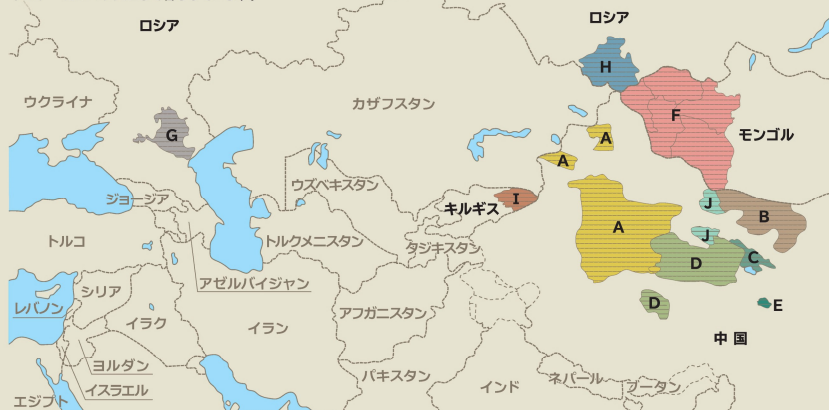


1.2 オイラトとは誰なのか

オイラト人は、トルキスタン、チベット高原、モンゴル高原、中央アジア、東ヨーロッパに分布しています。中国(地図中のA～E地域)やモンゴル国(F)ではモンゴル民族のひとつのサブグループとして、ロシア連邦ではカルムイク共和国(G)の中心となる民族として、そしてシベリアに位置するロシア連邦アルタイ共和国(H)の中心となる民族として、キルギス(クルグズ)共和国イシク・クル地域(I)ではイスラーム教を信仰するサルト＝カルマク人として暮らしています。



売りたい羊を群れから連れ出す
オイラト人青年



オイラト牧畜民は異なる国家や民族として宗教的な境界を横断しながら、さまざまな他者と共に暮らしてきました。それでは、そもそも彼らにとって、集団的な境界はどのように存在しているのでしょうか。A、B、Eの3地域の事例で考えてみたいと思います。



放牧に出かけるオイラト人女性



朝一番にヤクの乳を絞るオイラト人女性

Ойрад

アジア草原における共生 2



2 境界の存在

2.1 テュルク系との境界

生業形態や生活慣習の面において、A地域、新疆ウイグル自治区で暮らすオイラト牧畜民たちは、地域的な多数派民族となるムスリムのカザフ牧畜民とほとんど変わりません。オイラト人にとってチベット仏教徒であることが、自他の境界維持に重要です。土地の守護神などをまつる宗教儀礼や結婚式の際にみられる屠畜方法はウルチラフという胸部を開く方法であり、日常生活で行われるイスラーム的な屠畜方法とは異なります。



イスラーム式の作法に則って屠畜する
オイラト人とそれをみる孫娘



2.2 チャイニーズ系との境界

B地域、内モンゴル自治区西部アラシャ地域にはチャイニーズ系の移民が多く、人口的にマジョリティになっていて、そのほとんどが灌漑農耕を営んでいます。牧畜民のオイラト人とチャイニーズ系移民との間には、言語文化、宗教信仰、そして生業形態などの各方面において差違が存在します。2000年代以降、国の政策によって、オイラト人の定住化と農耕化が進んでいますが、両者の境界は明確です。



内モンゴル西部バダンジン砂漠のオアシスの中にある
オイラト寺院

2.3 チベット系との境界

チベット高原(C、D、E地域)で暮らすオイラト人の間には、言語文化的に「チベット化」が顕著です。特に、チベット高原のオイラト諸社会の中でも大きな勢力をもつE地域において、人々の第一言語はチベット語となり、屠畜方法も地域のマジョリティのチベット人と同様の「窒息法」を用います。

さらには、チベット人との通婚も盛んです。それでも、彼らは、チベット語で自分たちのことを「ソグ」^{ソグ}と表現し、周囲のチベット人のことを「ウレ」^{ウレ}と呼びます。前者はモンゴルを、後者はチベットを意味します。特に牧草地をめぐる紛争の場面においては、オイラトは部族ごとの軍旗を掲げ、結束力を誇示します。言語文化的にチベット化してはいるものの、彼らとチベット人との間に境界は存在します。



ソグ・ジャ(チベット語で「モンゴル帽子」)
をかぶるオイラト人女性



部族の軍旗を掲げるオイラト人男性とその家族



ソグ・ザム(チベット語で「モンゴル式長服」)
を着用した
オイラト人の力士たち

Ойрад

アジア草原における共生 3-1, 3-2



3 限定共生

3.1 テュルク系との共生

A地域ではテュルク系との関係で「サルト＝カルマク」や「モンゴル＝キルギス」といった集団があります。「サルト＝カルマク」はイスラーム教を信仰するオイラトです。彼らの先祖は戦乱から逃れて、今の新疆ジョウソウ県からキルギス共和国に移住したオイラト（ワールド部族）の人たちで、民族集団「サルト＝カルマク」を形成しました。その後その一部が逆にキルギスから新疆に戻り、中国の公定民族区分では「サルト＝カルマク」という民族はないため、その末裔は今キルギス族になり、地域のキルギス族やカザフ族などのムスリム、そして仏教徒のオイラトと共生しています。

他方、「モンゴル＝キルギス」とされる仏教を信仰する集団の存在は、「キルギス＝ムスリム」という固定観念を覆すものとなります。彼らは18世紀後半にオイラトのワールド部族と統合し「ワールド・モンゴル・十ソムン（十部）」という集団を構成し今日に至りました。オイラト牧畜民と同じくチベット仏教を信仰しており、両者の通婚も頻繁に行われています。彼らの本当の民族はモンゴルがキルギスカをめぐる議論が長年続きました。彼らは身分証明書の上でキルギス族になりますが、当事者はむしろ「モンゴル＝キルギス」としてのアイデンティティが強いようです。彼らにとってモンゴル＝キルギスの「キルギス」は「十ソムン」の「キルギス・ソムン」であり、「モンゴル」は仏教を意味するものであるため、「モンゴル＝キルギス」のほうが自然です。

3.2 チャイニーズ系との共生

B地域では、オイラト系牧畜民とチャイニーズ系農耕民との相互関係の結果として「バグターマラ」という集団および「乾親」という擬制親族が生まれました。「バグターマラ」は「受け入れられた者」の意であり、外部から移民してきたチャイニーズ系農耕民で、オイラト式の名前をつけ、オイラト語を話し、チベット仏教を信仰する人たちやその子孫たちを指します。彼らは後に移住してくる新しいチャイニーズ系移民からもオイラト系とみなされます。チャイニーズ系移民たちはオイラト系の牧畜民と義理の親子関係である「乾親」関係を結びたがります。彼らの論理では自分たちの子どもに降りかかる不幸は、血縁的にそして言語文化的にも異なるオイラト人にその子の義理の親になってもらうことで、回避できるとされるからです。その発想はオイラトにとっては必ずしも共感できるものではありませんが、相手の要請を断ると幸運（ケンゲあるいはヤン。[4]を参照）が低減するという理念に基づいて、オイラトは要請を受け入れ、一種の共生が成立します。

オイラト人が暮らす河南蒙旗は中国の「三大名馬」の一つ「河曲馬 Hequ horse」の主産地



敬慕するサルト＝カルマク人とオイラト人



モンゴル＝キルギス人一家



モンゴル＝キルギス人男性



バグターマル老人（壁に貼られているのは幸運（キーモリ）の絵）

Ойрад

アジア草原における共生 3-3



3.3 チベット系との共生

オイラト系牧畜民の一派が17世紀中期にチベット高原に移り、チベット系牧畜民と相互関係を築いた結果としても多くのユニークな部族が生まれました。その一つが、「ラジャ＝ジャサグ」です。当部族は1930年代まで中華民国政府から「モンゴル」と認められ、モンゴル文字の公印も持っていました。その後、オイラトの主流派に当たる河南蒙旗（E地域）から分離して今日ではチベット族になりました。ラジャは寺院の名ですが、ジャサグは清朝時代に、モンゴル地域特有の官位の名です。ラジャ＝ジャサグの人びともオイラト系の先祖たちの歴史をよく知っていますが、そのことと自分たちが今はチベット人であることが矛盾しているとは思えないようです。

そして、オイラト系とチベット系牧畜民との関係でいえば、中国の西部大開発事業の一環としての定住化に伴い、2000年以降に生まれた「ニエディ」と呼ばれる親族の集まりの現象が目立ちます。「ニエディ」とは、ある特定の歴史上の人物の末裔が、一か所に集まり、様々なイベントを開催し、一族の歴史を記録し出版するような現象です。集まる人数は場合によって千人にも上ります。同じニエディの参加者にはモンゴル族（オイラト）もいればチベット族もいます。ニエディにおいては親族が民族を横断していきます。



ラジャ＝ジャサグ部族名の由来にもなったラジャ寺、手前は黄河



最後のジャサグ・ホンボ（王）の娘



最後のジャサグ・ホンボの娘宅に保管されている、ホンボが住んでいたモンゴル・グルの骨組み



親族の集まりの参加者は多い場合、数千人にも上る

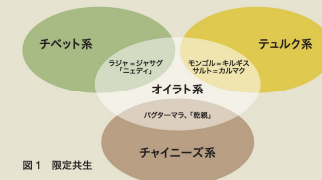


図1 限定共生

オイラト系とテュルク系・チャイニーズ系・チベット系との関係は異なる文脈で結ばれ、そこで生まれた集団や現象も同じとはいえません。しかしそれらの共通項が「共生」です。共生の結果として生まれたのが諸々の地域集団の存在です。生起する諸現象は共生の条件であり、過程です。ここでの共生は、種内における共生という意味で、限定共生といえます。

Ойрад

アジア草原における共生 4-1



4 一般共生

オイラト系牧畜民にとって、家畜や犬そして樹木をはじめとする動植物、そして草原や泉といった無生物は、重要な資源です。とりわけ、家畜から得られる乳や肉、そして毛皮などは、牧畜民の生存にとって必要不可欠です。家畜は屠られたり売られたりするためにいるともいえます。



家畜自慢大会に登場した雄羊



ミルク酒を作るオイラト人夫婦



牛革で作られた酒器

4.1 家畜を屠らず売らない、ツェタル実践

ところが、オイラト社会では牧畜民が何らかの理由で特定の家畜を屠らずに天寿を全うさせることがよくみられます。これは「ツェタル」と言われます。ツェタル実践においては、家畜だけではなく動物一般、植物や無生物と彼らとの間の境界が超越されてゆき、結果として生まれた「ツェタル家畜」や「ツェタル樹木」そして「ツェタル泉」などに代表される人間と人間ならざるものとの間の共生関係がみられます。ツェタル実践は、牧畜民が僧侶に依頼し一定の儀礼を行ってもらいますが、直接ツェタルの対象となる動植物にリボンをつけ、自分の願いを口で伝えるという簡単な手続きで済まされるのがほとんどです。



雪の草原を歩くツェタル馬(奥)、手前は仔馬



料理屋の前に立つツェタル羊



ツェタル家畜の耳に飾るリボンをつけているオイラト人親子



リボンをツェタル牛の耳に飾るオイラト人夫婦

Ойрад

アジア草原における共生 4-2



4.2 ツェタル実践のきっかけ

大事な資源である家畜に対してその利用を放棄するかのようにもみえるツェタル実践は、なぜ行われるのか。それは仏教の教えだからという説もあれば、肉食が主である牧畜民による罪滅ぼしであるという贖罪説もあります。しかし、現地では、牧畜民たちが日常生活の喜怒哀楽に基づいてツェタルを行っていることが分かります。きっかけは、例えば、孫娘の学校での対人関係の問題だったり、娘の難産だったり、夫の精神的な病だったり、活仏(高僧の生まれ変わり)の入院だったりするような人間側に起因するものもあれば、狼に襲われても死ななかった仔羊だったり、人間の遺体運び、険しい山道を通して、山頂にある鳥葬の葬儀場まで登っていて、一度も失敗したことはなかったヤクだったりするような家畜側に起因するものもあります。家畜だけではなく犬などの動物も、そして動物だけではなく、低木や一本の樹木などの植物、さらに動植物に限らず、泉やオボーと称される土地の神を祀る高台といった無生物もツェタル実践の対象になりうるのです。



ツェタル樹木を祀るオイラト人一家



ツェタル樹木に飾られているリボン



放牧から家に帰る途中でオボーを祀る二人のオイラト人少年



自由気ままなツェタル犬を優しく微笑んでみるオイラト人女性



ツェタルされた泉

Ойрад

アジア草原における共生 4-3



4.3 ツェタル実践のロジック

ツェタル実践のきっかけは多様ですが、基本的にヤンと呼ばれる絶対的幸運を獲得するたけ行われます。ヤンは人間のみならず動植物や無生物も含むあらゆるものの中に遍在します。同時に何らかの理由で、ヤンは特定の個体に多量に別個体になかったり偏りがあります。人間や家畜動物などが、病んだりうまくいかなかったりするときにはその個体のヤンが低下したからだと思われ、ヤンを上げるため家畜やその他の動植物をツェタルする必要があります。そのため、牧畜民は家畜を売る際、その家畜のヤンをキープしておくべく、必ずその毛を一握り取って燃やしたりどこかに大事にしまったりしておくのが流儀です。それがやがてヤンの塊になるケースもあります。



売られた家畜の毛(ヤン)が大切に保管される土壁の隙間

ヤンは観念であると同時に実体です。ヤンの下で人間とその動植物や無生物は連続するのです。ヤンを追求するという文脈においてツェタル実践がみられ、そこでは人間と人間ならざるものとの境界が超越可能になります。既述のようにオイラトにとって境界の存在は明確ですが、同時にそれは乗り越え可能でした。そのことが、人間と人間ならざるものとの関係に注目したツェタル実践でも裏付けられました。人間と動物・植物・無生物との重なる部分であるツェタル家畜・ツェタル樹木・ツェタル泉やオボ(高台)、人間と他種との共生を表すものとみることが可能なら、種を横断するこうした共生は一般共生といえます。



売る予定の羊のヤンをキープすべく、一握りの羊毛を真剣に取るオイラト人



家畜の毛(ヤン)を束ねて作った扇形状の「ヤンの塊」が、玄関口にぶら下がる



図2 一般共生

Ойрад

アジア草原における共生 5

5 牧畜民的な「共生」

[2]で述べた、日常生活で資源という客体的な立場にある人間ならざるものの存在が、[4]での文脈では主体性をもち、人間との共生、つまり、一般共生が現れます。一般共生と、[3]でみた人間界内部での限定共生との間の関係は、因果というより相関でしょう。二つの共生の間に時間的な優先順位はありませんが、両者の間には強い類似性がみられます。図1の中に図2をみることで、逆もまた然りです。

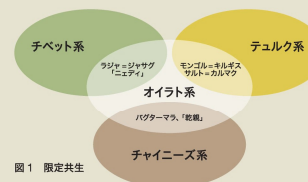


図1 限定共生

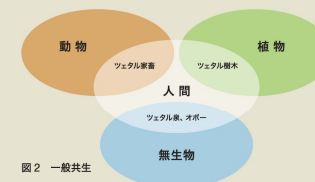


図2 一般共生

はじめに[1]で言及したように、現代社会で「共生」について論じる際、それは基本的に人間同士の共生であり、ここでいう限定共生のことです。またその共生は、境界とは相容れない関係にあると指定され、共生の実現は境界をなくすことを前提とします。それはここでいう一般共生と限定共生を別ものとして考えているからではないでしょうか。それに対して、牧畜民の判断において、一般共生と限定共生は常にコインの裏表のように、一つの全体をなしています。

牧畜民の間にみられる共生と境界(差異)とは相生関係にあります。理念においては境界の存在を前提としながら、実践においては境界を超越しています。オイラト系牧畜民の経験から分かるように、アジア草原における牧畜民的な「共生」とは、境界(差異)そのものをなくすことによってではなく、境界や差異に価値評価を付与しないことによって成り立つ、他者との遠近感覚です。



【参考文献】
シンジルト 2021「オイラトの民族誌」—内陸アジア牧畜社会におけるエコロジーとエスニシティ 明石書店
シンジルト・地田敬一郎編 2021「牧畜を人文学する」—名古屋外国語大学出版会
シンジルト編 2022「目でみる牧畜世界—21世紀の地球で共生を探る」—風響社



僧侶たちから私は多くのものを学んだ



チベット高原の「短の集積地」は仏教寺院である



オイラト人の本拠地とされる天山山脈北麓を移動中